

「ん？どうして？」

「うう……ッ♡♡…く……イク……っ♡も……イっちゃう…から…あ……ッ！♡」

息を震わせ、涙目になって訴える。

ぞく…っぞく…っはしと快感が疾るのに合わせ、躰が水中で何度も跳ねる。

「ふうん……。『イク』とか、もう知ってるの、君……」

男の吐息交じりの声が、肩口でじだ耳朶を打つ。

「あぁッう……！♡♡」

淫らなことを知っていた仕置きだとももいうように、股間へのぐりぐりが強くなる。

男はそのまま膝で少年の股下を押し上げつづけ、とうとう少年の脚が床から浮く。

「い♡、…やぁ……♡」

自重が股に集中し、そこから尋常でない淫楽が駆けあがる。

そうされながら、

「乳首もこんなにいやらしい色になって……。普段から自分でいじってるんじゃないの？」

「あぁっ…んうっ♡♡♡」

桜色から紅ぼたん色になった硬いそこを、こりゅ♡こりゅ♡こりゅ♡、と連続で^お圧されると、その痺れが下半身からの刺激と体内でかち合い、弓なりにのけぞってしまふ。

「こんなにいやらしい躰で公共のプールに入っただけなんて……。これはおもしろいところの騒ぎじゃないねえ？ほら、言って？正直に。さっきここで、何してたの… …？」

「あ！♡あっ！♡あぁあッ！♡♡♡」

ズ♡、ズ♡、ズンッ♡と節をつけて膝を押し上げられ、躰が揺さぶられる。

股間から電流のような疼きが疾^{はし}り抜け、頭を悦樂でいっぱいにされた。

「あぁ…っ♡♡う…っ♡、お、……。あぁッ！♡♡」

「なに？聞こえないんだけど……？」